

# 都市の「庭」をみんなで育てる

## ●環境共生型のガーデンデザインの担い手となる

### 庭の仕事を学ぶ ワークショップ

東京都世田谷区池尻の廃校を活用した『IID 世田谷ものづくり学校』の校庭に、有限会社「温室」代表、ガーデンデザイナーの塚田有一さんとフリーランスキュレーター石田紀佳さんが主宰する「学校園」がある。ここで、2018年3月から【学校園で実地を学ぶ「剪定」基本の「き」】というワークショップが月1回開かれている。これは、「庭師の技術を身に付けたい、普段の庭の手入れのスキルアップをしたいという人向けに、中木クラスや灌木類を中心に『手を入れ、息を通わせる』という、植物との関係を広げ豊かなものにする庭師の仕事を学ぶ」というものだ。そこで講師をしているのが、「マメシバ造園」河合菜採さんだ。

### 「マメシバ造園」ができるまで

河合さんは東京出身のいわゆる氷河期世代。大学の哲学科で美術史を学び、建築に関する卒論を書き、卒業後、建築事務所や住宅設備メーカーで設計の技術者として家の内部を作る裏方の仕事に携わった。しかし、30代になる頃、施主との直接的なコミュニケーションがなく、営業から来る注文を機械的に



独立当時のリヤカー。休日はこれに花の苗や苔玉を積んで営業した

さばくためにコンピュータの画面だけを相手に設計をする働き方に限界を感じたという。

河合さんは、無機質な仕事とは対照的な生活を求め、世田谷の広い庭のある古民家を7名でシェアするコレクティブ居住『松陰 commons』(2010年3月で終了)に住み、地主さんとしきりのない共用の庭を持つ環境共生型コーポラティブハウス『櫻ハウス』のコミュニティ(<https://setagayansson.com/people/30>)と関わった。そこで、住宅の外側である庭におけるガーデンデザイナーの役割の重要性や、有機的に環境を整える造園の力に気づいたようだ。そして、ちょうど募集をしていた造園学校に入り、造園の基礎を学んだ。

河合さんは造園学校卒業後、造園会社での修業と都市緑化会社勤務(ここで、ゼネコン的な建築+植栽の設計を経験)を経て、2010年、リヤカー1台で「マメシバ造園」として独立を果たした。最初は近所の個人宅の庭の手入れをしながら、休日にはリヤカーに花の苗や苔玉を積んで営業するというスタイルから始まり、個人の造園家のアシスタント、造園家同士で2トントラックをシェアして仕事をするなど、じわじわと仕事の範囲を広げていった。2016年、軽トラック、マメシバ号を入手、現在は東京都調布



現在の軽トラック「マメシバ号」



「マメシバ造園」河合菜採さん。写真提供：及川英貴

市を拠点に世田谷、杉並、鎌倉等さまざまな場所で、樹木医、ガーデンデザイナー、ガーデンプランナーといった人々と、自然な樹形を活かした庭木の剪定や、住人参加による環境共生型の庭育てのプロジェクト、ワークショップなどを手掛けている。

### 「マメシバ造園」の仕事の仕方

マメシバ造園で河合さんが大事にしていることは、効率重視の大手企業の庭づくりとは逆のことをするという点だ。それは人間にも植物にも無理をさせないということ。効率を重視しようとするれば、形をきれいに整えることだけを優先して、植物の生態を無視した荒っぽい剪定や、環境に有害な農薬や除草剤を使うことになる。一方、自然の樹形を活かした剪定は手間がかかり、しかも植物それぞれの都合に合わせて効率が悪い。また、庭全体を一気に整えるわけではないので、前後の違いがわかりにくく、単発のビジネスとして成立させることが難しい。しかし時間が経つにつれ、庭の土壌や植物が健康になり、多様な生物の共生による生きた庭に育っていくので、人の快適性も増していく。こうしたことをワークショップ等を通じて、人々に理解してもらうのも造園家の仕事であると河合さんは考えている。

## ● 都会の小さな里山を楽しむ「園芸部」

### 自然な庭を楽しむ「園芸部」活動

筆者がオーナーを務める会員制シェアキッチン&シェアハウス『okatteにしおぎ』には庭がある。元々は筆者の自宅の庭だが、お世辞にも手入れが行き届いているとはいえない。そこで畑や植物に興味のある会員の人が「okatte園芸部」というグループを作り、河合さんの指導のもと、毎月庭をいじってみようということになった。

これまでの活動では、庭に生える雑草の見分け方（雑草の花も鑑賞できること、食べられる草、ナガミヒナゲシなど増えてほしくない雑草の処理の仕方）や庭の掃除方法、ドクダミとニンニク、ごま油等を使った自然農薬作りと散布（ドクダミは農薬作りのほか、虫よけスプレー等の材料にもなり、取ったばかりの新鮮なドクダミを畑に敷くことで作物の虫よけにもなる。自然農薬作りはほぼ食べられる材料を使うので、食品を扱うキッチンで安全にできる）、剪定した木の枝を丸く編むパイオネット作り（この中に草取りで出た雑草や、剪定で出た小枝、葉などを入れていくことで良質の腐葉土ができる）、庭木の剪定の仕方（自然な樹形を活かし、成長しすぎた枝を落とし、これから成長する枝を残すことで、樹木の風通しを良くし、健康的に程よい大き



道路に面した植栽のメンテナンス

さをキープするための剪定方法）、畑作りなどを指導してもらい、自分たちでやってみようということを行った。また、庭で採れる梅やアンズ、ベリー類を使って梅酒やジャムを作ったり、庭に生えるユキノシタやギボウシ、ヤブガラシを収穫して天ぷらにしたり、ヨモギモチを作るといったことを楽しんだ。

### クリエイティブな営みとしての「庭仕事」

こうした庭仕事は、かつての日本では、都市でも各家庭で行われてきた生活作業であった。しかし、家族人数が減少し、庭師として従事する職人も減少する中で、こうした作業を担う人は次第に減っていった。ガーデニングブームもあったが、主婦や高齢者が一人で庭仕事をするとなると、負担が大きいのも事実である。このことと地価の上昇により、最近是新築の住宅も庭を設けず、ちょっとした植栽だけしか行わないケースが増えている。

一方、マンション等の集合住宅においては、共用部を「庭園」や「森」として、自然や緑を売り物にして売り出すことが増えている。都心のビルでは、屋上緑化や壁面緑化が進められている。こうした植栽や庭園、緑化は、そこに住む住人にとっては、建物のエクステリア（外構）の一つでしかないことも多い。こうしたエクステリアとしての植物のメンテナンスは、手間をできるだけ省き、効率を重視して行われがちだ。このため、農薬や除草剤が多用され、剪定も外観をいかにスピーディに整えるかが重視される。植物は育てるものというよりは、買って飾り、汚くなったら捨てて入れ替える消費財として扱われる。



庭に生えているドクダミとニンニクを刻んで自然農薬作り

『okatteにしおぎ』の「園芸部」はそうした都市の植物事情とは異なる形での活動を楽しんでいる。メンバーは、いわゆる趣味の「園芸」や「ガーデニング」にはそれほど親しんでいないが、その分、庭づくりへの固定観念がなく、雑草の花の愛らしさ、植物の性質を活かした剪定により、庭木の枝に風が通り、見た目もすっきりすること、雑草も意外とおしく食べられることに素直に驚き、ちょっとした冒険を楽しむことができる。また、よい庭というと、有名な寺やインスタ映えするフラワーガーデンのような落ち葉一つない整形された「庭」をイメージするが、実は、そこに生活して快適なのは、雑草や虫も含めた自然のサイクルや生態系が健康的に回っている都会の里山のような庭なのだということにも改めて気付かされる。そうした庭を一人ではなく、誰かと一緒にゆっくりとゆるく育てていく営みは、完成形を維持するための「作業」とは異なり、面倒なこと、効率的に終わらせたいことというよりは、クリエイティブな喜びを伴う楽しい遊びとなっている。

たけのうち さちこ●(株)シナリオワーク代表取締役。女性消費者を中心とする消費者研究、マーケティング戦略立案を多数手がける。2015年4月、自宅を改装し、シェアハウス&シェアキッチン『okatteにしおぎ』をオープン。18年3月、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科博士前期課程修了。

## ●庭をまちの共有財産に

### 各地で進む庭の共有化

「okatte園芸部」は、個人の庭を造園の専門家のコーディネーションのもと、数人で環境共生型の庭として育てていく試みである。こうした庭の共有化は、最近、いろいろなところで広がっている。

例えば、『IID 世田谷ものづくり学校』のある東京都世田谷区では、一般財団法人世田谷トラストまちづくりの事業の一環として、「環境にやさしい街並づくり～3軒からはじまるガーデニング支援制度」を行っている。これは、区内の道路沿いの民有地3軒以上がグループで管理する緑地に、2年間、ガーデニングアドバイザーとして専門家を派遣し、緑化資材購入費の一部を助成するというもの。2018年4月現在24グループが登録されているが、多くは植物の自然の姿を活かしつつ、花などを植える緑地づくりである。

千葉県柏市には「カシニワ制度」がある。この制度は、一般財団法人柏市みどりの基金により、柏市内で市民団体が利用するオープンスペース（樹林地や空き地等）や一般公開可能な個人の庭を「カシニワ=かしの庭・地域の庭」と位置付け、カシニワへの関わりを

通じて、みどりの保全・創出、人々の交流の増進、地域の魅力アップを図ろうとするもので、貸したい空間と借りたい人のマッチングや助成金の交付等を行っており、2018年5月の「カシニワフェスタ2018」には、77カ所のカシニワが公開され、オーナー、市民団体などによるコンサート、自然観察会、マルシェといった催しや案内が実施された。

自治体による取り組みだけでなく、保育園や学校、商業施設、集合住宅等で、住人が共同で庭づくりを行おうとする取り組みも増えている。ハーブや食べられる実のなる植物を植える「エディブルガーデン」や多様な生物の生態系を保全する環境づくりを行う「ビオトープ」を作り、その維持管理を共同で行うことも多い。公益財団法人都市緑化機構による「第28回緑の環境プラン大賞」の受賞例を見ると、こうした取り組みが多く挙げられている。

### 個人財産から共有財産へ

さらに、庭を取り巻くさまざまな事柄を共有する試みも広がっている。収穫した野菜や地域の住人の手作り品を販売するマルシェもその一例である。減少が危惧されているミツバチを地域で増やすために、草花や花木を植え、採れた蜂蜜を利用して楽しもうという、各地の“ミツバチプロジェクト”（東京では銀座、渋谷、仙川等）も徐々に拡大しつつある。『IID 世田谷ものづくり学校』の「学校園」では、誰でも庭仕事に参加できるほか、裏庭に藍を植えて藍染をする、自生する梅の実を漬ける、オリーブの実で石鹸を作る、庭の植物で節約料理



柏市緑の基金による「カシニワフェスタ2018」のサイト  
<http://k-midori.net/kashiniwafesta/>

を作るなど、本来の自然との関わりをものづくりや暮らしに活かすワークショップが開催されている。

こうした試みが興味深いのは、自分たちの生活を楽しむことから始まり、それがいつの間にか地球環境といった大きなテーマにもつながる取り組みに成長していくことである。マルシェで売った野菜は子どもたちが安心して食べられるものにしたい、おいしい蜂蜜を採るために、なるべく自然な環境で育った花の咲く植物を増やしたい。そこから、自分たちの生活を見直し、住む地域や都市をどのようにしていきたいのかというオーナーシップが醸成されていく。さらにそのような変化が消費者としての態度にも影響を及ぼすことで、企業もそれに対応する必要が出てくるのである。

河合さんは、少子高齢化の進む日本のこれからの庭は、個人の資産として完成形を売り、それを造園業者や植木職人だけがメンテナンスするという形ではなく、街の景色を作る共有財産の一つとして、未完成の素材からみんなで育てていくことを楽しむ形になっていくという。それは公園や街路の植栽も同様である。そのためには造園の仕事をブラックボックス化せず、見える形にして啓蒙していく必要があると考えており、仲間とともに活動が続けていきたいそうだ。



『IID 世田谷ものづくり学校』の「学校園」サイト  
<http://meguruniwa.blogspot.com/>